



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society



Newsletter



2025.07

vol. 24

- 002 新理事長あいさつ
- 003 第52回日本肩関節学会学術集会 会長あいさつ
- 004 第53回・第54回学術集会のお知らせ
- 004 肩関節外科医を志す人達へー肩の魅力を語る
わたしの肩診療とJSESの発刊
- 005 国際論文奨励賞受賞者の声
- 008 海外留学だより
- 011 トラベリングフェロー帰朝報告
ASES トラベリングフェロー帰朝報告 (井上 和也)
ASES トラベリングフェロー帰朝報告 (落合 信靖)
SECEC トラベリングフェロー帰朝報告 (山門 浩太郎)
- 021 各委員会報告
雑誌「肩関節」編集委員会
国際委員会
高岸直人賞決定委員会
社会保険等委員会
教育研修委員会
学術委員会
広報委員会
財務委員会
定款等運用委員会
リバーズ型人工肩関節運用委員会
日本肩の運動機能研究会運営委員会
用語委員会
選挙管理委員会
地域格差検討ワーキンググループ
- 029 日本肩関節学会 委員会リスト
- 031 事務局からのお知らせ
- 032 編集後記



新理事長あいさつ

一般社団法人 日本肩関節学会 理事長 今井 晋二

日本肩関節学会理事長の滋賀医科大学整形外科今井晋二です。理事長に就任して6か月になりますが、この6か月で多くの変化がありました。第一は過去10年にわたり事務局業務を担当していたISS社が2025年1月末日をもって事務局業務から撤退することになったことです。2024年10月に理事長に就任して、すぐに数社から見積もりを取って、理事会での審議を経て最終的に一社に絞りました。



これまで日本肩関節学会の事務局業務に大変多くの時間と労力を割いていただいた川村典子さんの留任の可能性も含めて数社を検討しましたが、最終的に川村さんは日本肩関節学会の事務局業務から外れることになりました。川村さんの退職につきましては、多くの会員から感謝の言葉が寄せられています。この場を借りて過去10年の貢献に改めて感謝の意を表したいと思います。

最終的に新事務局は毎日学術フォーラムにお願いする事になりました。各種委員会の開催方法や会員への周知の方法などにおいて、これまでのISS社のやり方とは大きく異なる事が多く、戸惑いを覚える会員も多々おられるかとは存じますが、新事務局とひとつずつすり合わせて円滑な事務局業務を作り上げたいと思っています。

もう一つはこれまで編集・出版業務を委託していたロータリー社が人材不足により学会の編集・出版業務から撤退されることになった事です。元々編集業務は毎日学術フォーラムにある程度、委託する方針で契約を進めていました。しかし、出版業務についてはこれまで通りロータリー社が担当してくださると思っていたので青天の霹靂でした。

数社の候補から見積を取り編集委員会が中心となって選定作業を進めて頂きました。最終的にジャーナルサポート社にお願いすることになりました。日本肩関節学会の編集委員会は査読の質が非常に高いので、できるだけ無駄を排除した契約内容にしました。編集・出版業務のコスト増も懸念されるところです。今後も注意深く業務をすり合わせていきたいと考えています。

このように6か月の間に事務局の移転、編集業務の変更、出版会社の変更など矢継ぎ早に多くの事務的な変更がありました。しかし、本丸は財務の改善です。現在の日本肩関節学会の財務状況ではホームページの改良などすこし大きな予算執行があれば、一般会計から捻出することは不可能で赤字決算になります。このままでは財産を切り崩していくしかありません。

最大の出費はJSES購読料で、特にコロナ禍以降の円安により1ドル150円で換算した場合、数年で財産を切り崩し尽くす勢いです。ASESとの交渉の結果、2023年から1ドル120円で、すなわちディスカウントしてもらっています。2025年も1ドル120円換算でお願いしていますが、これの構造的な改革が必要なのは火を見るよりも明らかです。

本年度中にJSES購読料問題を解決したいと考えています。また、財務状況を現執行部の任期、すなわち2年間の間に何とか黒字体質に転換したいを思っています。暗い話ばかりではありません。菅谷前理事長は寄付を募ろうとおっしゃっていましたが、大口の寄付の話も来ています。うまく実現できるよう菊川副理事長が奔走してくれています。会員の皆様に良い報告が出来ますよう楽しみにしています。

第52回日本肩関節学会学術集会 会長あいさつ

福岡大学筑紫病院整形外科教授 **伊崎 輝昌**

このたび第52回日本肩関節学会学術集会を主催させていただきます、福岡大学筑紫病院整形外科の伊崎輝昌と申します。これまで福岡大学および筑紫病院としては、第3回（高岸直人教授）、第13回（同）、第16回（松崎昭夫教授）、第38回（柴田陽三教授）と開催してまいりましたが、このたび再び肩関節に関する世界で最も歴史ある本学会を福岡の地で開催できることを、大変光栄に存じます。



本学術集会は、2025年10月10日（金）～11日（土）に福岡国際会議場にて開催を予定しております。今回の学会テーマは「学而不厭：継続的探求と次世代への継承」といたしました。この「学而不厭」は、中国古典『論語』述而篇に由来する言葉であり、「常に学ぶことを厭わない」という孔子の教えを示しています。肩関節外科学においても、絶えず学び続けて最先端の知を追求し、それを次世代へと継承していく姿勢が極めて重要であるとの思いを込めて、本テーマを掲げました。

本学術集会では、「肩関節手術の長期成績と未来への課題」、「高齢化に伴う肩関節疾患とその克服」、「肩関節手術の成績向上に向けた工夫と基礎的探求」という具体的なテーマを設定し、多角的な視点から議論を深めることを目指しております。

国際化をさらに推進すべく、欧米からはPhilippe Valenti先生（France）、Anthony A. Romeo先生（USA）、Robert Tashjian先生（USA）、John-Erik Bell先生（USA）、Alessandro Castagna先生（Italy）、韓国からはYong Gurl Rhee先生、Sang-Jin Shin先生、Kyu Cheol Noh先生（2024年KSES会長）、Hyun Seok Song先生（2025年KSES会長）をお招きし、国際的な視点での知見を共有する場としても充実した内容を予定しております。

肩関節はその複雑な構造と多様な機能のため、治療においてリハビリテーションや日常生活指導が欠かせません。併催される第22回日本肩の運動機能研究会では、肩関節疾患の治療とケアにおける最新のエビデンスと実践方法を共有し、理学療法士、作業療法士、看護師など、多職種がそれぞれの専門性を活かしつつ、互いの視点を尊重し連携を深めることを目指します。

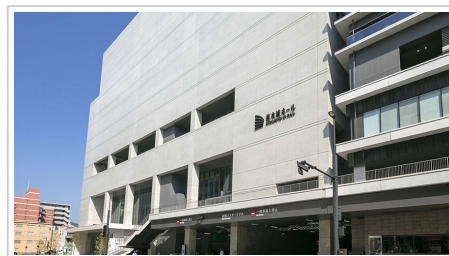
10月の福岡は、日中の平均気温が20℃前後と非常に過ごしやすく、市内中心部では大濠公園や福岡城跡など、自然と歴史が調和した散策スポットをお楽しみいただけます。夜には福岡タワーや中洲の夜景を望みながら、屋台文化に触れていただくのもこの地ならではの魅力です。さらに足を延ばせば、太宰府天満宮や秋月の歴史的な街並みなど、文化と風情にあふれた名所も点在しております。

本学術集会が、肩関節外科学のさらなる発展に寄与し、参加される皆さま一人ひとりにとって有意義でありある時間となることを心より願っております。歴史と文化に彩られた福岡の地で、国内外の最新知見を共有し、肩関節外科の未来を共に切り拓く2日間となりますよう、多くの皆さまのご参加をお待ち申し上げます。

第53回・第54回学術集会のお知らせ

第53回日本肩関節学会

学術集会会長：北村歳男（熊本整形外科病院）
 併催：第23回日本肩の運動機能研究会
 研究会会長：菊川憲志（熊本総合病院整形外科）
 【開催日】2026年10月30日(金)～31日(土)予定
 【開催場所】熊本（熊本城ホール）予定



第54回日本肩関節学会

学術集会会長：菊川和彦（マツダ病院整形外科）
 【開催日】2027年10月29日(金)～30日(土) 予定
 【開催場所】広島（広島国際会議場）予定



肩関節外科医を志す人達へー肩の魅力を語る

わたしの肩診療とJSESの発刊

あんしんクリニック顧問 水野 耕作

研修医初期（無給副手）のころ、大学医局で信原先輩の手術助手をしたこともあり、誘われるままに、1974年の第1回肩関節研究会に参加しました。50年前でした。その後、研究会への参加を続けるうちに肩関節疾患に興味を持つようになりました。

一般に肩関節疾患の主訴は、肩が痛い、腕が上がらない、が二大兆候です。しかし、当初では、患者の肩を前にして、どのように診察を進めていけばよいのかわかりません。圧痛部位の特徴、肩関節の動きと疼痛との関係などを知らなければなりません。当たり前のことですが、肩疾患名を知ることです。同じ疾患の中にもその深い意味が隠されており、その区別を見出すには、臨床所見の特徴と画像所見をしっかりと見極めることが大切です。

そのうちに、外傷性肩関節不安定症と非外傷性肩関節不安定症との違いに興味を持つようになりました。反復性肩関節脱臼とLoose Shoulderが典型例ですが、当時の診断手段としては、臨床所見の特徴と関節造影が主です。造影手技が悪いと強い痛みを与えますし、微妙な関節唇陰影は判定できません。肩MRIが応用し始めましたが、今のように素晴らしい画像ではありません。客観的な診断に苦慮しました。

外傷性肩不安定症にはBankart lesionの修復（Bankart法手術）が合目的な手術です。肩関節鏡手術

が導入し始めのころで一部の先生に限られており、一般に、大きく切開し展開する従来の観血的手術です。Bankart lesionは深部にあり、上腕骨頭を避けて広く展開することが難しく、狭い視野のなかで、糸を関節包にしっかりと修復するには困難を伴い、ときには長時間の手術時間を要しました。特殊な筋鉤やBankart用器具を種々考案されましたが、容易な手術術式ではありませんでした。そのためにPutti-Platt法やBristow法など手技の異なる方法が出現したのです。

次第に経験と報告を積み重ねて、肩関節医の仲間入りを許され、1991年に第18回日本肩関節研究会の会長を仰せつかりました。そのときに、日本肩関節学会に名称が変わりました。経緯は次のごとくです。そのころ内科をはじめ、多くの分野が細分化され、それぞれに学会名を表記するようになりました。研究会のままの名称では親睦会とみなされ、大きな学会場を確保できません。急遽、幹事会（現：理事会）に諮り、日本肩関節学会の名称を許され、総会で正式に承認されました。

同時に、そのころ世界を見渡しても、1977年以来18年間も肩関節研究会・学会を組織させ運営している国はありませんでした。アメリカ合衆国でさえ、American Shoulder & Elbow Surgeons (ASES) を1982年に設立したに過ぎません。DR. Neerが中心となって国際的な学会組織を設立し、その看板雑誌としてJournal of Shoulder & Elbow Surgery (JSES) を発刊したいとの機運がありました。第18回日本肩関節学会会長にも発刊に協力するよう要請があり、幹事会で編集委員会を立ち上げ、会長のわたしがそのままBoard of Trustees、International Editorial Boardの一員となりました。翌年1992年にJSESが発刊できました。

しかし、発刊した以上は多くの論文の提出が必要です。そこで、1977年の「雑誌肩関節」第1巻第1号以来発刊し素晴らしい内容を報告している日本肩関節学会に注目が集まりました。そのうちの和論文は英文論文となり、JSESの発展に貢献しています。もちろん二重投稿を厳重に注意して、Board of Trusteesに諮り、その検閲を得て国際編集委員会でaccept され、多くの論文が掲載されるようになりました。そのために、日本編集委員会だけの査読で、国際査読委員会をパスして掲載されるようになりました。しかし、現在では通常の国際雑誌に則り、厳しい査読を得て、多くの論文がJSESに掲載されており、喜ばしい限りです。

国際論文奨励賞受賞者の声

大阪公立大学 中澤 克優

このたびは、第3回国際論文奨励賞を賜り、誠にありがとうございました。このような名誉ある賞を頂けたことは、身に余る光栄であり、深く感謝申し上げます。

私は、今回Journal of shoulder and elbow surgery (JSES) に 2本とJSES internationalに 2本、合計4本の論文を発表したことで表記の賞を受賞することが出来ました。内訳としましては、1本が低温大気圧プラズマの腱骨連結部に対する修復促進効果に関する基礎研究、残る3本はリバース型人工肩関節置換術に関する研究成果でありました。

低温大気圧プラズマですが、プラズマは活性粒子（電子、イオン、分子、ラジカル、光）の集合体であり、気体に高温加熱や電氣的衝撃などの高エネルギーを加えることで分子の解離や原子の電離が生じ発生します。低温大気圧プラズマは、プラズマジェットから照射され、周囲の大気との相互作用によってイオン、ラジカル、活性酸素（ROS）や、一酸化窒素（NO）や二酸化窒素（NO₂）などの反応性窒素種（RNOS）を生成し、

これらの活性種により生体組織に対する有効性があることが報告されております。今回の研究では、低温大気圧プラズマを腱骨連結部に照射することで、同部の修復が促進されることを明らかにしました。今後は、この低温大気圧プラズマの臨床応用に向けて、更なる研究を進めて参りたいと考えております。

また、リバーズ型人工肩関節置換術に関しては、その有用性が多く報告され、症例数は近年増加しております。一方で、いまだに多くの臨床的な課題があります。私は今回、DEXAを用いた人工関節周囲の骨密度、MRIによる三角筋断面積の測定法、そして拘束性ライナーを使用した際のROM Simulationに関する研究を報告しました。今後も、リバーズ型人工肩関節置換術の良好な長期成績を目指し、臨床研究に積極的に取り組んで参りたいと思います。

最後になりますが、本研究に際しご指導くださいました大阪公立大学の諸先生方に深く御礼申し上げます。今後もさらなる研鑽を重ね、このような名誉ある賞を再び頂けるよう、努力を惜しまぬ所存です。

末筆ながら、本稿執筆の機会をいただきました広報委員会の皆様に、心より感謝申し上げます。

八千代病院 川島 至

この度は、肩関節学会国際論文奨励賞を賜り、誠に光栄に存じます。この場をお借りし、謹んで御礼とご挨拶を申し上げます。

私は名古屋大学整形外科の膝・肩・スポーツグループに所属し、肩関節・膝関節疾患およびスポーツ整形外科の診療に従事してまいりました。受賞論文の一つは、名古屋大学在籍中に北海道八雲町の住民健診データを用いて行った研究で、腱板断裂患者における骨粗鬆症治療率が著しく低いことを報告したものです。骨密度の低下と腱板断裂の関連は既に多くの報告がありますが、修復術時のアンカー固定性の低下、対側腱板断裂の発生、さらには修復後の脆弱性骨折による著しいADL低下などの事態を防ぐためにも、骨粗鬆症への積極的な介入が重要であると考えております。二つ目の論文は、名古屋大学在籍中に非常勤で勤務していたあさひ病院において、岩堀裕介先生が関節鏡下バンカート修復術後の関節窩骨吸収を防ぐために工夫されている、「関節窩辺縁の骨を小さく剥離する術式」が実際の関節窩のサイズに与える影響について報告したものです。また、肩関節外科および研究の手法と論文の書き方について学ぶべく、2020年に船橋整形外科スポーツ医学・関節センターにて短期間の国内留学をさせていただきました。留学終了後も長く継続的にご指導をいただき、共同研究の機会にも恵まれております。受賞論文の三つ目は、船橋整形外科の松木圭介先生のご指導のもと、2D/3Dレジストレーション法を用いて動態解析を行った研究です。高橋憲正先生がリバーズ型人工肩関節置換術(rTSA)を御執刀・フォローされている患者さん方を対象に、大結節と肩峰間におけるインピンジメントの発生と、そのリスクとなる指標の提案を行いました。rTSA後の肩関節動態は未解明なことも多く、理想的な動態やインプラント設置位置は今後の課題と考えます。高橋先生、松木先生方との共同研究はこれに留まらず継続させて頂いており、今後また改めてご報告できれば幸いです。

私は2025年1月までUniversity of Floridaへの留学の機会を頂き、その翌月の2月より名古屋大学関連の八千代病院にて整形外科部長として勤務しております。現在は肩・膝関節いずれも多くの方の外来診療および手術を担当しておりますが、これまで肩関節に専念されている、もしくは肩・肘関節診療に従事されている先生方に対して一抹の引け目を感じておりました。今回このような名誉ある賞を頂戴し、肩関節診療に対する自らの熱意が伝わる契機となれば、これ以上の喜びはありません。

今釜史郎教授をはじめ、名古屋大学整形外科教室で御指導頂きました先生方、岩堀裕介先生、高橋憲正先生と松木圭介先生をはじめとする船橋整形外科肩肘チームの皆様、そしてご支援いただいた全ての方々

に、心より深く御礼申し上げます。今後も本賞の受賞を励みに、臨床に直結する研究を積み重ねてまいり所存です。引き続きご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

整形外科北新病院 伊藤 雄

この度は第3回国際論文奨励賞という大変栄えある賞を賜りまして誠にありがとうございました。理学療法士として初の受賞という栄誉を頂きまして本当に嬉しく思います。論文執筆に際しましては、末永直樹先生、大泉尚美先生を始めとした当院上肢班の先生やリハビリテーション科スタッフにたくさんのご指導を頂きました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

私はこれまで学会発表をするまでで研究を終えてしまっており、論文という形で世の中に残すということを出来ていませんでした。2021年に初めて英語論文がアクセプトされ、完成した論文を見た際には、何よりも嬉しく頑張って論文を書いて良かったと心から思え、本賞を設立された末永先生からの激励もありもっと英語論文を書いて世界に発信しようというモチベーションになりました。3編のうち最初にJSESにアクセプトされたこと、また、第2回の国際論文奨励賞を受賞された川真田先生の姿を見たのもあり、絶対に3編以上アクセプトされて理学療法士として初めての受賞を目指してやると毎日少しずつですが頑張ることができました。

世の中には私以上にたくさんの論文を世界に発信し、国際舞台で活躍されている理学療法士の先生がたくさんいらっしゃいます。まだ論文を書いたことが無い先生も、自分の行った研究を世界に発信するために是非論文を書き始めてみて欲しいと思います。私もまた日々の臨床における疑問を研究、論文へと昇華し、再びこの栄誉ある賞を頂けるようにまた一歩ずつ歩みを進めていきたいと思っています。

末筆になりますが、改めまして本賞の創設、選定に関わっていただいた皆様に深く感謝申し上げます。私の声とさせていただきます。この度は誠にありがとうございました。

倉敷中央病院 高山 和政

この度はこのような賞を頂き、誠にありがとうございました。思い起こせば、2014年に肩学会に入会し、これまで研鑽を積んで参りました。日本人の先生方が書かれた英語論文を目にする度に、いつかは自分も、と思いを馳せて参りました。2019年から独学で英語論文を書きはじめ、滑って転んでなんとかアクセプトまで辿りついた事は、自分にとって大きな自信になりました。一昨年、昨年と本賞を頂きましたが、当然ながら執筆した論文すべてがJSESにアクセプトされた訳ではありません。むしろリジェクトされた本数の方が余程多いです。ではどうすればアクセプトの回数（必ずしも率ではありません）を上げることができるのか、自分なり考えていること、心がけていることを、後輩達に向け、二つ書きたいと思います。一つは「習慣にすること」です。研究を行うにはデータが必要です。臨床研究を行う場合、日頃からclinical questionを持つ必要があると思います。そういった視座にたてば、日常診療の中でデータを採取する習慣が身に付きます。そして執筆そのものを習慣化することです。これは二つ目にも繋がるのですが、毎日少しずつでもいいから書く、研究を進めることが重要だと思います。人間は弱いものです。意志の力でもってすべての物事を成し遂げられる人もいますが、多くの場合、「今日はやる気がおきない」、「飲み会があるから」といってやらない理由を簡単に見つけてしまいます。

二つ目は、とにかく「打席にたつこと」だと思います。まずは投稿しなくてはアクセプトはありません。JSESのアクセプト率は約2割です。こう聞くと高い壁ですが、当たり確率2割で10回宝くじを引いて、少なくとも

も1度は当たりを引く確率はいかほどでしょうか？単純な余事象の計算になりますが、 $1.0 \div 0.107$ で約89%となります。つまり10回投稿すれば、1回ぐらいアクセプトされる確率は約90%です。こう考えるとなんとなく通りそうな気がしてきます。実際には、書いているうちに（ポジティブ）フィードバックループがかかり内容は洗練され、アクセプトの確率はさらに高まっていくと思います。しかし一発必中でアクセプトは難しいと思います。筋トレするとき、筋肉だけで体重を増やすことができるでしょうか。自ずとぜい肉（無駄）もついてきます。まずは圧倒的な量をこなすことが、論文のみならず手術手技の向上を図るうえでも重要だと思います。リジェクトされたからといって人間性を否定されるわけも、先が閉ざされるわけでもありません。せいぜいプライドが少し傷つく程度です。まずは思い切って書いて、投稿することが大切だと思います。

私自身、書く面白さ、世に問う意義深さが少しわかってきました。これからも精進致します。この度は有難うございました。

海外留学だより

山形大学整形外科講座 宇野 智洋

1. 自己紹介

米国スタンフォード大学整形外科に留学している宇野智洋と申します。山形大学を2010年に卒業後、2013年に同大学整形外科に入局し、関連病院で山形県における肩関節外科の先駆者である後藤康夫先生、村成幸先生、靱田大作先生のご指導のもと、勤務し肩関節に関わる臨床研究に従事してまいりました。2018年には大学院に進学し、白色家兎を用いた腱板変性モデルを作成し、骨髄由来多血小板フィブリンを用いた腱板修復の研究に取り組みました。現在はYunzhi Peter Yang 教授の指導のもと、バイオマテリアルを用いた骨折・骨欠損治療や腱板修復に関する再生医療の研究に従事しており、主に動物モデルを用いた研究を行っております。



写真1：サマーパーティー、Yunzhi Peter Yang研究室の仲間と

2. 海外留学を行う事になったいきさつ

私が海外留学を決意した大きな理由のひとつは、英会話に対する苦手意識を克服したいという思いからでした。一般的には「英語が苦手なら留学は避けるべき？」と考えられるかもしれませんが、英語論文の執筆経験を通じて、自分の考えや疑問を英語で発信したいという思いが芽生えました。そのため大学院在学中に駅前留学やオンライン英会話を始め、英語力向上に努めました。同門の丸山真博先生がスタンフォード大学に研究留学されていたご縁で、整形外科の他の研究室にて動物実験を行う整形外科医を探していることを知り、丸山先生のご推薦により、貴重な留学の機会をいただきました。

3. 海外留学での生活:不安と現在

カリフォルニアは円安に加えて記録的な物価高が続いており、渡航前は生活面、とくに、住居について大きな不安がありました。今回は単身赴任での渡米となったため、Facebookなどを通じてスタンフォード大学周辺の日本人コミュニティに相談し、運良く日本人シェアハウスに入居することができました。カリフォルニアでは、シェアハウスは割と一般的で、渡米直後には多くの生活情報を共有してもらったり、食事・外出・スポーツなどを共に楽しんだりできたため、大変ありがたい選択肢でした。その後は2度の引っ越しを経て、現在は3か所目のシェアハウスに居住しています。これまで共に生活した方々は各分野のスペシャリストで、自身の人生では得難い貴重な話を伺うことができ、大きな学びとなりました。また、英会話のメンターとしてスタンフォード大学の最初のresidentをして現在は整形外科医の第一線を退かれたDr. Robert G Aptekarと知り合えたことやスタンフォード関連の草野球チームにも参加させてもらっていることは非常によい経験です。スポーツ観戦も大きな楽しみの一つで、大学スポーツとは思えないほどの迫力ある試合が楽しめ、花巻東高校から野球留学している佐々木麟太郎選手の試合も観戦しています。

4. 家族の反応について

留学の話を家族に伝えた際は、驚きと心配が入り交じった反応がありました。妻と3人の娘がいますが、上の子が小学校高学年であったこと、そして物価高の影響もあり、今回は単身赴任を選択しました。妻には家庭のことを任せきりになっており、子供達にも不便な思いをさせてしまっていますが、最終的には、応援してくれた家族には深く感謝しています。帰国後には、恩返しをしなければなりませんね。



写真2: 単身留学生の語らい



写真3: English teacher (Dr. Robert G Aptekar)

5. これから海外留学を考えている方へ

海外留学に少しでも関心のある方に伝えたいのは、「不安があっても挑戦することで必ず成長できる」ということです。準備には時間と努力が必要ですが、そのプロセス自体がかけがえのない経験となります。アメリカの大学は分業体制が整っていて研究助手の支援を受けながら研究を進められるというイメージがありましたが、実際には多くの作業を自分一人で行う必要がありました。研究留学を検討している方には、日本での基本的な研究手技を整理し、メモとして持参することをおすすめします。

また、同時期には隣の研究室に神戸大学の篠原先生、佐賀大学の村山先生、九州大学の薄先生、慶応義塾大学の栗原先生、琉球大学の伊藝先生などが留学されており、同世代の整形外科医として貴重な時間を共有できました。整形外科に限らず、他分野・他大学、さらに世界中の研究者と出会えたことは大きな財産で

す。加えて、シリコンバレーならではのかもしれませんが、スタートアップ企業の関係者や医療以外の分野の方々との交流もありました。私は社交的な方ではありませんが、自分から積極的に行動し、人とのつながりを大切にする姿勢が重要だと実感しています。

現在、留学を考えている先生方にとって、アメリカの現状は気がかりな点が多いと思います。研究費の停止や新規研究費の凍結、さらには個人単位でのVISAの取り消しといった情報が、連日のようにネット上を賑わせています。スタンフォード大学でも、ごく一部ではありますが、学生のVISAが取り消されたという事例も報告されています。研究費に関しては、スタンフォードのような私立大学では国家予算に全面的に依存しない運用がなされているものの、共同研究に関連する予算の凍結など、少なからず影響がでています。今後数年は、研究分野において不安定な状況が続くことも予想されますが、科学技術の進歩にとって研究活動はかせないものであり、事態が改善に向かうことを強く願っています。これから留学をお考えの先生方には、最新の情勢に加え、受け入れ研究室の研究資金状況などにも十分ご注意くださいをお勧めします。

6. スタンフォード大学での研究活動の様子

大学院時代に動物実験の経験があったことに加え、前任の留学者である京都大学の前川裕継先生からも情報提供をいただいていたが、異国の地で実験を自ら立ち上げるということに対する不安は大きいものでした。実際に渡米後すぐに実験の開始を求められ、様々な手続きを一人でこなす必要があり、今振り返ると非常に困難なスタートでした。

最初はバイオマテリアルを用いた動物実験に取り組みました。私の所属する研究室は整形外科に属してはいますが、他のメンバーは主にマテリアル系のエンジニアであり、医師は私一人です。3Dプリンターで作製したハードマテリアルに成長因子や細胞を混合したソフトマテリアルを組み合わせたハイブリッドマテリアルを、大腿骨の骨欠損部に移植するというラットモデルを用いた実験を行っています。このハイブリッドコンポジットが、将来的には関節窩の骨欠損に応用できるのではないかと期待しています。

また肩関連に関する研究では、日本と同様に白色家兎を用いて陳旧性腱板断裂モデルを作成し、コラーゲンを用いたハイブリッドマテリアルを併用した腱板修復の研究を行っています。驚いたことは、アメリカでは獣医が全身麻酔のために気管挿管を行い、術場スタッフが機器準備・体位設定・消毒・ドレーピングを担当するなど、まるで病院の手術さながらの体制が整っていることでした。術後は集中治療室にて獣医が管理を行い、術者は執刀に専念できる環境です。一方で、一回の手術費用が数千ドルに上るなど、そのコストの高さにも驚かされました。



写真4：家兎の腱板断裂手術



写真5：スタンフォード整形外科忘年会、整形外科の研究者

最後に

このような貴重な留学の機会を支えてくださった高木理彰教授、鈴木朱美前医局長、結城一声医局長、丸山真博先生をはじめ、同門の先生方に心より感謝申し上げます。



写真6：Stanfordの草野球チーム

トラベリングフェロー帰朝報告

ASES トラベリングフェロー帰朝報告

奈良県立医科大学整形外科学教室 井上 和也

2024年9月17日から約1カ月間にわたり、JSS/ASES Traveling Fellowとして千葉大学の落合信靖先生と一緒にアメリカで研修させていただく機会をいただきました。私は前半の約2週間について報告させていただきます。

ASES Traveling Fellowでは、訪問施設と日程はASES側で組んでいただき、ホテルや移動手段は各自で予約するという形でしたので、約1カ月間のホテル、国際線のフライトと、アメリカ国内のフライトや鉄道を、落合先生と電話などで連絡を取り合いながらすべてを予約して、万全の体制でアメリカに向けて出発しました。

最初の訪問先はニューヨークのColumbia Universityでした。2日間にわたりWilliam N. Levine先生（写真1）とCharles M. Jobin先生（写真2）の手術を見学させていただきました。腱板4件、アノミカル人工肩関節置換術（TSA）6件、リバー型人工肩関節置換術（RSA）3件、脱臼1件、外傷2件と多くの手術を見学させていただきました。脱臼の手術では、本邦では容易に使用できないDistal Tibial Allograftを用いた手術も見せていただきました。ほとんどの手術をフェローやレジデントの若い先生が執刀しており、非常に教育的でありました。また、私が海外で手術見学することが初めてだったこともあり日本とは違うことが多く、全ての手術が日帰りで行われていることに大変驚きを覚えました。3日目はColumbia University内にある立派なカンファレンスルームにおいて、研究発表をさせていただきました。Columbia University内の多くの先生方がおられる中で大変緊張いたしましたが、無事研究内容を伝えることができました。そ

の後Levine先生の外来も見学させていただきました。個室に先に患者さんが入って待っており、そこにDrが入っていき、握手で始まり握手で終わるというスタイルで、日本の外来との違いを感じることができました。

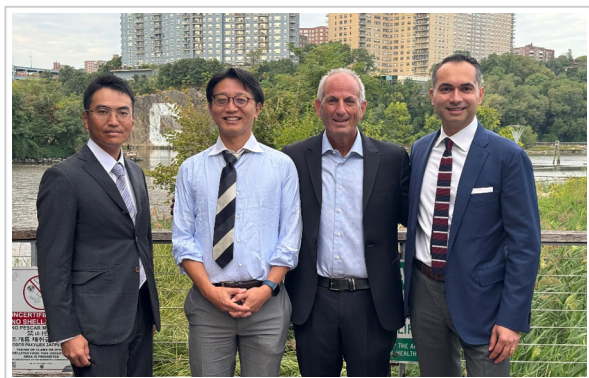


写真1: Columbia大学。William N. Levine先生（中央右）と



写真2: Columbia大学。Charles M. Jobin先生（中央左）と

2つ目の訪問先は同じくニューヨークのMount Sinai Hospitalでした。他の訪問先もそうだったので、病院に入るために提出しなければならない書類が多く、特に感染症の予防接種（インフルエンザ、COVID-19、麻疹、風疹、肝炎ウイルスなど）をしていないと病院に入れない施設が多かったです。Mount Sinai Hospitalはインフルエンザの予防接種をしていないと絶対に施設に入れないと言われ、9月時点で日本ではまだインフルエンザの予防接種は開始されておらず、私もしておりませんでした。急遽Mount Sinai Hospital訪問前日にインフルエンザの予防接種をしてくれるクリニックを自分たちで探し、落合先生と2人アメリカで予防接種を受けるという貴重な体験もしました。今後、Traveling Fellowに行かれる先生は出発されるまでに、予防接種の確認と、それを証明するための英語書類の準備をお勧めいたします。

Mount Sinai HospitalではLeesa M Galatz先生とBradford O Parsons先生（写真3）の手術を見学させていただき、研究発表の機会もいただきました。Mount Sinai Hospitalにおいても、フェローやレジデントの若い先生が執刀しておりました。

3つ目の訪問先はボルチモアにあるJohns Hopkins Hospitalでした。Uma Srikumaran先生（写真4）の手術とEdward MacFarland先生の外来を見学させていただきました。Johns Hopkins Hospitalでは、アキレス腱のアログラフトを用いた下部僧帽筋移行術を見ることができました。ちょうどこの頃から大きなハリケーンが来ているという噂を聞くようになりましたが、この頃は他人事のように聞いていました。

4つ目の訪問先はメンフィスにあるCampbell Clinicでした。整形外科単科の病院で非常にきれいな施設で、実験設備も非常に充実しておりました。ここではTyler Brolin先生とQuin Throckmorton先生（写真5）の



写真3: Mount Sinai Hospital。Leesa M Galatz先生（右から2番目）、Bradford O Parsons先生（中央左）との食事会



写真4: Johns Hopkins Hospital。Uma Srikumaran先生（中央）と手術場にて

手術を見学させていただきました。人工関節と腱板修復を見学させていただいたのですが、予定されていた手術が2件中止になりました。1件は保険からの許可が下りないために中止となり、もう1件は患者さんが著明な肥満とのことで点滴が入らず、PICを入れてから再度手術予定を組むという、日本ではなかなか見られない理由での手術中止に驚きました。Campbell Clinicにおいても研究発表を行う機会をいただきました。発表自体は滞りなく終わったのですが、発表後にQuin



写真5: Campbell Clinic. 研究発表中。Tyler Brolin先生(中央左)、Quin Throckmorton先生(中央右)

先生より、次の目的地であるグリーンヴィルにハリケーン(Helene)が直撃し、訪問するはずであったSteadman Hawkins Clinicが停電しており、訪問することが難しいであろうことを伝えられました。Quin先生のお知り合いの先生がシャーロットにおられるとのことで、急遽連絡を取っていただき、次の目的地がグリーンヴィルからシャーロットに変更となり、ホテルと飛行機を急遽手配して、シャーロットに向かうこととなりました。

5つ目の訪問先はシャーロットにあるOrthoCarolinaとなりました。シャーロットは非常に綺麗な町並みで、COVID-19流行以後NYなどから移住してくる人が増えているとのことでした。突然の訪問にもかかわらずNady Hamid先生(写真6)には5件の手術を見せていただきました。手術は5件すべてが人工関節だったのですが、1つの症例で、患者さんの上腕骨が大きすぎ、一番大きなセメントレスシステムを挿入しても固定性が得られず、セメントを使用しなければいけない症例があり、なかなか日本では経験できないような症例でした。また突然の訪問にもかかわらず、Hamid先生の自宅にも呼んでいただきバーボンパーティーをしていただきました。

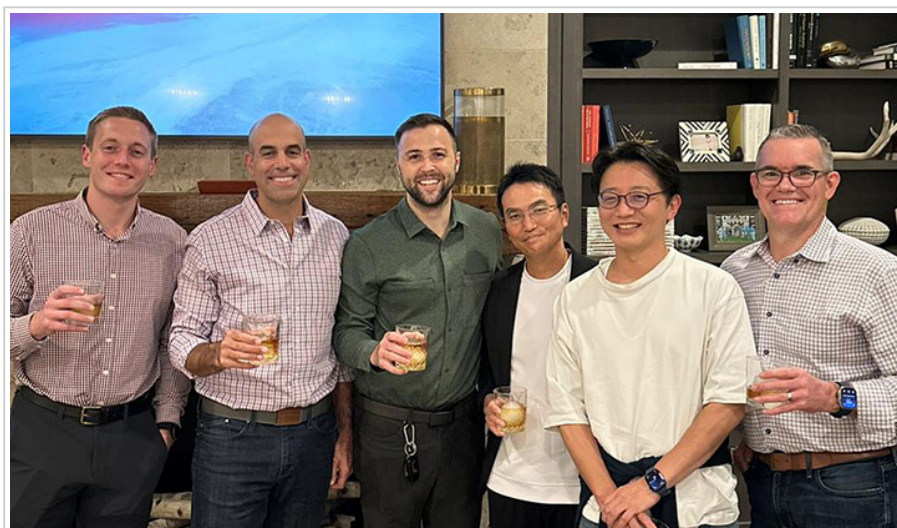


写真6: OrthoCarolina. Nady Hamid先生(左から2番目)の自宅でバーボンパーティー

どの病院の先生方も大変親切にさせていただき、非常に濃密な1ヵ月間でありました。

次の訪問先はタンパですが、後半は落合先生が報告していただけます。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった日本肩関節学会の理事、代議員の先生方、今回のTraveling Fellowに私を推薦してくださった末永直樹先生、1ヵ月ずっと一緒に過ごさせていただき、色々とお助けいただいた落合信靖先生、長期出張を許可いただきました大学及び関連病院の先生方にこの場をお借りして深謝いたします。ありがとうございました。

ASES トラベリングフェロー帰朝報告

千葉大学医学部整形外科 落合 信靖

2024年9月18日から10月19日の5週間、JSS/ASES Travelling Fellowとして奈良県立医科大学の井上和也先生とともに、米国の8施設を訪問し、ASES annual meeting に参加する貴重な機会をいただきました。ここでは fellowship の後半部分についてご報告いたします。

ハリケーン Helene の影響を受けて急遽訪問することになった Charlotte を後にし、本来の予定通りフロリダ州タンパの Mark Frankle 先生を訪問しました(写真1)。しかし、ここでも第2のハリケーン Milton に直面することになりました。予定では Frankle 先生のご自宅訪問、ボートツアー、ホッケーの試合観戦、カンファレンスなどが用意されていましたが、すべて中止となり、ご自宅での食事(カラオケを歌う機会もありました)と翌日の手術見学のみとなりました。手術は、DJO のインプラント開発者でもあ



写真1

り RSAの第一人者である Frankle 先生のこだわりが詰まった外方化デザインの3件を見学し、外方化の重要性について直接お話を伺えたのは非常に貴重な経験でした。

ところが、午前中の手術の最中に「午後からハリケーンがタンパを直撃するため、危険なので急いで移動した方がよい」との判断が下され、急遽、DJO 使用者である Chicago の Rush University の Grant Garrigues 先生に連絡を取っていただき、シカゴへ向かうことになりました。この移動が、1か月間で最も過酷なものとなりました。本来は飛行機で移動する予定でしたが、空港閉鎖と住民の大規模避難の影響で不可能となり、空港のレンタカーショップで車を借り、飛行機が飛んでいる空港を目指して陸路で移動することになったのです。高速道路は住民の避難による大渋滞で、フロリダ州を脱出し、アトランタまでの約12時間以上を運転(途中、高速道路の休憩所で車の中で仮眠)し、ようやくシカゴ行きの飛行機に乗ることができました。

シカゴでは、急なお願いにもかかわらず Gregory Nicholson 先生(写真2)、Grant Garrigues 先生(写真3)に快く受け入れていただきました。Nicholson 先生はアメリカで最初に RSA を行った先生で、腱板再断裂後の RSA、後方グレンノイド骨欠損に対する骨移植併用 RSA、若年 OA 患者に対する inlay TSA(小さいポリエチレンを埋め込むタイプ;若いOAの患者さんではglenoid componentの緩みが生じにくく、臨床成績も良好とのことで最近使用されてきているようです)、さらに Nikhil N. Verma 先生の MCL再建+internal brace など、多彩な症例を見学できました。翌日は Grant Garrigues 先生の変形性関節症に対する RSA、DJOの後上方augmentの RSA、鏡視下腱板修復術などを見学させていただきました。お二方の先生は急な訪問にもかかわらず、手術見学、外来見学、ラボツアー、シカゴ観光など様々なおもてなしをしてくださいました。

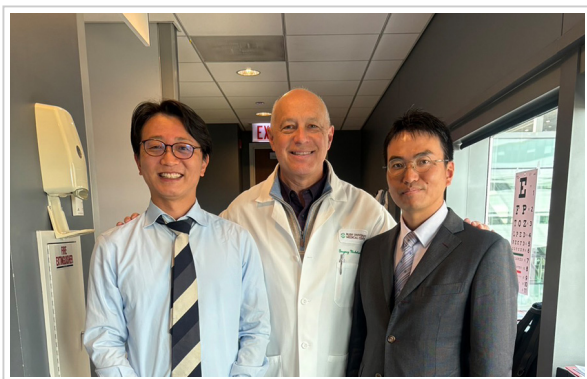


写真2



写真3

最後の訪問地はサンアントニオ、TSAOG Orthopaedics の Robert Hertzler 先生 (写真4) のもとを訪問しました。2日間の手術見学では、RSA、鏡視下腱板修復、distal tibia のアログラフトを用いた関節窩再建 (3Dプリンターで模型を作成し、術前シミュレーションを行っていました) などを見学しました。また、この施設には Stephen Burkhart 先生の Burkhart Bioskills Lab があり、ここで distal tibia アログラフトを使用した手術を実際に体験させていただきました (写真5)。さらに、サンアントニオでは研究会も開いていただき、そこには肩関節の世界的権威であり、すでに引退されている Stephen Burkhart 先生 (写真6) も来てくださり、自分の研究発表を行いアドバイスをいただくなど、非常に貴重な時間を過ごすことができました。



写真4

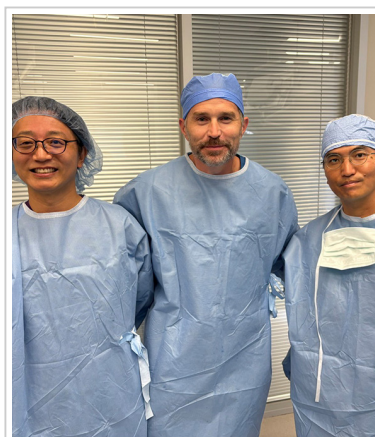


写真5



写真6

旅の締めくくりは ASES (American Shoulder and Elbow Surgeons) annual meeting への参加でした。ASES の meeting は通常 closed で、member のみが参加できる学会ですが、今回 traveling fellowship に参加したことで ASES の corresponding member となり、参加することができました。学会では第1会場、第2会場を中心に一般演題発表、シンポジウム、ICLなどを聴講しました。特に興味深かったのはVRを用いた人工関節のシミュレーションで、日本でも今後、手術手技の教育にVRが活用される可能性を感じました。また、学会では日本からASESのリハビリテーション学会ASSETに招待されて参加されていた大阪医科薬科大学の三幡先生、そして三幡先生と親交の深いThay Q Lee先生と食事をご一緒し、最後の良い思い出となりました。

この1か月間、手術見学、カンファレンス、発表等、さまざまな貴重な経験をさせていただきました。手術はやはり人工関節が圧倒的に多い印象で、日本人との違いとして体格差が大きく、小柄な患者さんが少ないため、日本で議論される inlay・onlay のような問題は、米国ではどちらを選んでも安定した術後成績が得られているのではないかと感じました。また、英語での発表を何度か経験し、ある程度の英語力があると思いましたが、夜の食事会などの場面ではやはり語学力不足を痛感し、今後さらに研鑽が必要だと感じました。ハ

リケーンなど予想外の苦労もありましたが、1か月間にわたりさまざまな施設を見学できたことは、非常に貴重な経験であり、この経験をしっかりと肩関節学会に還元していきたいと思います。

最後に、今回の traveling fellowship に際し、ご尽力いただきました日本肩関節学会理事長の菅谷啓之先生、国際委員長の三幡輝久先生、面接で選考いただきました国際委員の先生方、事務局の川村さん、ご同行いただいた井上和也先生、そして長期出張を許可いただいた大学および関連病院の先生方に、心より御礼申し上げます。

SECEC トラベリングフェロー帰朝報告

関西医科大学附属病院 スポーツ医学センター 山門 浩太郎

昨年（2024年）9月4日から10月4日にかけて、SECECトラベリングフェローシップにてヨーロッパ各地の施設と学会に参加する機会を頂きました。ご選任いただきました国際委員会の諸先生方、学会員の皆様、そして受け入れていただきましたSECECの先生方に深甚な感謝を申し上げます。また、パートナーとして5週間をともにすごしたChul-Hyun ”ジョー“ Cho 先生 (Keimyung University Dongsan Hospital Keimyung University, Daegu, South Korea) とは熱い友誼を交わすこととなりました（図1）。重ねて感謝いたします。

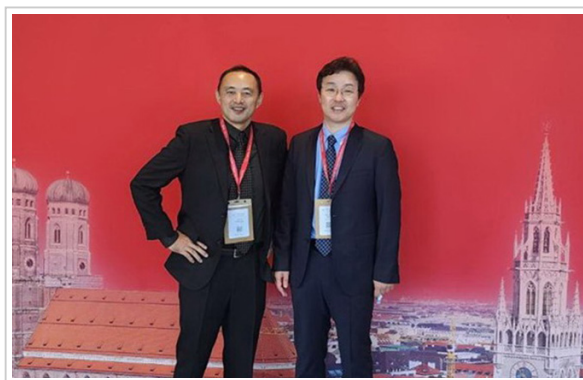


図1

今回のトラベリングフェローでは、Patric Raiss会長のSECEC Annual Congressの出席後、Philippe Collin 先生(Rennes, France)、Emilio Calvo先生 (Madrid, Spain)、Pascal Boileau先生 (Nice, France)、Alexandre Lädermann先生 (Genève, Switzerland)、Jörn Kircher先生 (Hamburg, Germany)、Ofer Levy先生 (Reading, UK)、そののち再びPatric Raiss先生 (Munich, Germany)を訪問し、Karl Wieser先生 (Zurich, Switzerland) の主催するBalgrist shoulder courseに参加したのち帰国しました（全行程は約5週間、図2）。

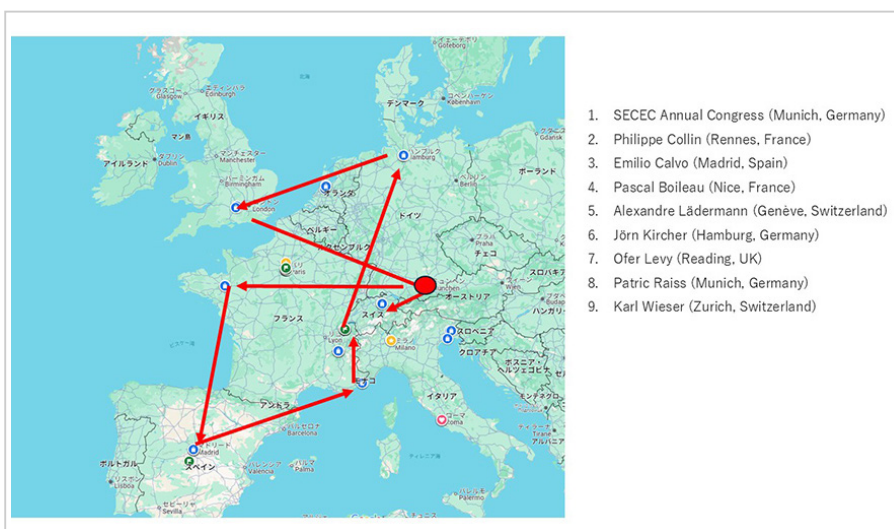


図2

1. SECEC annual meeting

2024年のSECECは、Patric Raiss会長のもとミュンヘン（ドイツ）で開かれました。菅谷前理事長が招待講演をつとめられ、またAsian Perspectiveのセッションが設定され私も口演の機会が与えられるなど、アメリカ、日本とは異なる視点と切り口の国際的な学会としてさらに拡大しているようです（図3）。一方で、応募演題のうち口演が35、ショート口演（3分）が90、ポスターが163と、きわめて狭き門となり、全体の採択率は4.3%だったそうです。SECECの前会長（2024年9月退任）のPhilippe Collin先生は、自ら6題を応募しすべて落選したと会長講演でお話されていました。しかし、そのうちの1つはAJSMに採択されたので、rejectになったからといってあまりがっかりしないようにと強調されていました。私も、JSESに採択された論文がポスターになりました。



図3

2. Dr Philippe Collin (Rennes, France)

SECECのあと、Collin先生の病院を訪問しました。あまりの寒さに驚きましたが、Rennesではこの時期の気候としてはめずらしくはないそうです。Open Latarjet, TSA, RSAを見学しました。注目したのはRSAのglenoid側のコンセプトで、広くおこなわれているreverse shoulder angleにあわせた設置ではなく、ほぼtiltのつかない外側化を目標としているそうです。もともとの回転中心に近づけることが狙いであるとのことでした。おそらくマーク・フランケル先生（タンパ、アメリカ）と同様のお考えと思われます。手術見学では、患者さんにさわることが無いよう、「簀巻き」にされました（図4）。初めての見学施設だったので、これがヨーロッパのスタイルかと驚きつつ納得していましたが、後にも先にもここだけの体験となりました。

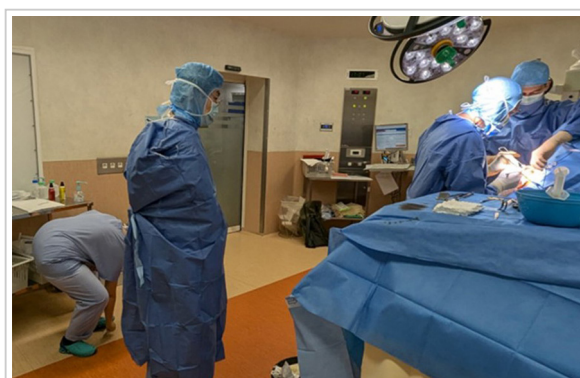


図4

3. Dr Emilio Calvo (Madrid, Spain)

Calvo先生には、鏡視下Latarjet（図5）、RSA、鏡視下バンカート修復、関節鏡視下授動術をみせていただきました。Rennesとうってかわって暖かい、むしろ暑い気候となり、手術室でもスクラブしての参加がゆるされました。また、マスク着用も緩く、病棟や外来はもちろん、手術室内でもマスク不着用者がみられました。我々2人のプレゼンを先生とフェローに披露し、フェローの研究をみせて頂きました。もちろん、そのあとに伝統的なスペイン料理をいただきました。



図5

4. Dr Pascal Boileau (Nice, France)

RSA、鏡視下Latarjet、ARCRなどを見学しました。各国からたくさんのFellowが短期～長期に滞在しており、私たちが到着したときは偶然、高知大学の森本暢先生がフェロー着任初日で、久々に日本語で会話ができました。外来はもちろんフランス語でおこなわれており、難度の高い体験となりました。一方、手術では宗家BIO-RSAや2件の鏡視下Latarjet (図6) が淡々とすすんでいくことに感銘をうけました。ニースの気候も観光施設も素晴らしく、多くの見学者とフェローが集うことに納得する訪問となりました。



図6

5. Dr Alexandre Lädermann (Genève, Switzerland)

ニースの後、スイスの国際都市であるジュネーブに移動し、レーダーマン先生の外来と手術を見学しました。壁のオブジェが関節鏡の部品で作られていたり、マネキンに学会参加証が山のように掛けられていたり、新たな使い方も目の当たりにしました (図7)。外来では、ほぼ全例にレーダーマン先生自らエコーを使用して診察をおこなっていたりと、日本と近いスタイルが印象的でした。アメリカではあまり見ることのないヨーロッパの進取性を感じます。夜は、チーズフォンデュをいただいたのですが、本場の店はチーズの香り (におい) がかなりつよく、服までチーズに浸ったようになりました。味は最高でした。

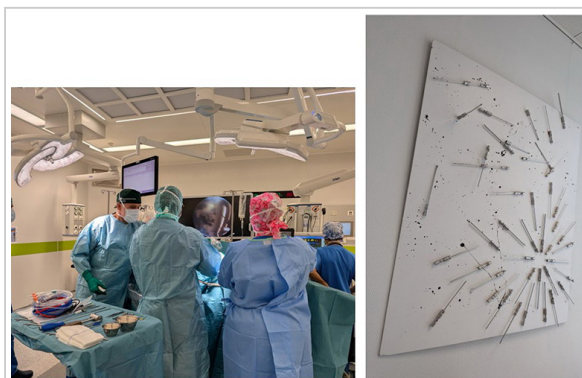


図7

6. Dr Jörn Kircher (Hamburg, Germany)

ジュネーブを発ち、ドイツのハンブルクに赴きました。ハンバーグをイメージしていたのですが、予想に反して海産物が主の都市だそうです。内陸に位置しているはずなのに運河をつかって毎日のように大型船が行き来しています。RSAとTSA、Open Latarjetなどを見せていただきました。カーシャー先生の手術は堅実できれいな手技で大変参考になりました。一方、同僚のRobert Hudek先生は大きな関節窩骨欠損に対する腸骨移植を併用した制動術やメタルのグレンオイドを使用したaTSAなど、かなり攻めた手術をおこなっておられました (図8)。



図8

7. Dr Ofer Levy (Reading, UK)

レヴィー先生の手術には驚きました。RSAとARCRをみせてもらったのですが、RSAでは上方アプローチから全例で肩鎖関節を切除し、5号糸を用いて後方腱板の部分修復を追加されていました。用いたインプラントはVersoというレヴィー先生オリジナルのショートステムインプラントです(図9)。デルタIIIと同じ時期の製品にもかかわらず時代を先取りした設計で、多くの長期観察例をお持ちでした。関節窩側の外側化はほとんど行われていませんでしたが、外来受診された患者さんの内外旋および挙上ROMは素晴らしく、RSAにおいてもなお腱板の果たす役割の大きさを痛感いたしました。



図9

ところで、Reading Shoulder InstituteはBerkshire Independent Hospitalに故スティーブン・コープランド先生が設立されたユニットです(図10)。レヴィー先生は、もともとご出身のイスラエルに戻られるつもりだったそうなのですが、コープランド先生が亡くなられたあと、跡を継がれることに決めたそうです。最近、築500年のお宅を少し改装されたとお話されていました(図11)。



写真10



写真11

8. Dr Patric Raiss (Munich, Germany)

イングランド(UK)から、再びミュンヘン(ドイツ)に戻り、ライス先生の施設でRSA, TSA, ARCRを見学しました。RSAではCTで計画した術前テンプレートにあわせて調整し使用するリューザブルPSIガイドを用いて関節窩のインプラントを設置しておられました。ガイド作成時間においても、廃棄物低減の

意味でも、有用な方策と感じます。また、SECEC事務局は、オクトーバーフェストの時期を選んでこの時期のミュンヘンに到着するプランを設定しており、ドイツビールの洗礼をうけました。オクトーバーフェストのビールは特別醸造で、アルコール度数が7%に増強しているそうです(図12)。ジョッキも重く、内容量も1Lと、いろいろな意味でヘビーな体験となりました。



図12

9. Dr Karl Wieser (Zurich, Switzerland)

トラベリングフェローの最後に、ワイザー先生主催のBalgrist Shoulder Courseに参加しました。先代教授のクリスチャン・ガーバー先生はすでに引退されており会場にもお越しではありませんでしたが、コースの講師はヨーロッパのみならず、アメリカ、カナダからも招聘されており、ワシントン大学のジェイ・キーナー先生や次期ICESES会長のジョージ・アスワル先生など、人気の演者のディスカッションを聞いたことは大変有意義な体験でした(図13)。JDワーター先生や、フィリップ・モロダー先生といった新進気鋭の臨床家もプレゼンに招待されていました。



図13

旅の過程にこそ価値がある – スティーブ・ジョブズ。

出発前はかなり長い旅程だと思っていたのですが、気づけば帰国していました。ジョブズは、旅で明確に何事かを得るのが重要ではなく、なければ無いでそれもあり、大事なものは過程だと語っていたそうです。今回のトラベリングフェローでも、論文からでは伝わってこない、言語化し難い、「なにか」に触れたように感じます。貴重な体験を形として提示できないことに対する言い訳になりますが、トラベリングフェローは行く前と後で、視点を変えてくれます。重ねまして、このような機会を頂けたことを深く感謝いたします。ありがとうございました。

各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

担当理事 内山 善康 委員長 新井 隆三

雑誌「肩関節」編集委員会では、現在第49巻の発刊準備を鋭意進めております。本巻には計169編（昨年は138編）のご投稿を賜りました。その内訳は学術論文125編、原著・総説1編、症例報告17編、proceeding 26編となっております。この場をお借りして、ご投稿いただいた会員各位、ならびに査読にご尽力いただきました代議員・査読委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

4月2日および8日にはウェブ編集会議を開催し、初回査読において少なくとも1名の査読者が掲載不適と判断した論文、原著・総説として投稿された論文、および審査過程で担当委員が検討を要すると認めた論文等について慎重に審議いたしました。著者の先生方におかれましては、senior authorと十分にご相談の上、査読への回答書および修正論文をご準備くださいますようお願い申し上げます。特に統計学的評価方法に関しては、投稿規定末尾の参考情報をご参照いただければ幸いです。

雑誌「肩関節」の刊行においては、採択論文のPDF化とJ-STAGEへの登載が不可欠ですが、本年度より従来の業務委託先が継続困難となりました。現在、新たな委託先の選定作業を進めておりますが、これまで格安で対応いただいていた経緯もあり、編集作業経費の増加が予想されます。つきましては、論文掲載費を一部値上げせざるを得ないかもしれません。これらの案件につきましては、最もリーズナブルな解決策を模索しているところです。

なお、雑誌「肩関節」委員会では、投稿規定およびチェック表を随時更新しております。ご投稿の際には、必ず日本肩関節学会ウェブサイト (<http://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html>) にて最新情報をご確認くださいよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

国際委員会

担当理事 三幡 輝久 委員長 長谷川 彰彦

トラベリングフェローの派遣と今後の受け入れ予定についてご報告させていただきます。

1. 2025年3月3日から3月30日まで石切生喜病院の平川義弘先生と公立福生病院の吉田勇樹先生がKSESトラベリングフェローとして、韓国の18施設を訪問され、The 32nd Annual International Congress of the Korean Shoulder and Elbow Societyで演題発表されました。
2. 2025年ASES Traveling Fellowと2026年SESEC Traveling Fellowの募集を2025年の日整会終了後より開始しております。必ず貴重な経験になることは間違いありませんので奮ってご応募ください。
3. 2025年10月8日から10月25日までSECECトラベリングフェロー2名(Dr. Riccardo Ranieri、Dr Mustafa Rashid)が訪日予定です。各地区担当の先生にはトラベリングフェローのお世話をお願いさせていただきますので、何卒よろしくお願いいたします。

高岸直人賞決定委員会

担当理事 谷口 昇 委員長 山本 宣幸

前委員長の船越忠直先生より引き継ぎ、委員長を拝命しました山本宣幸です。担当理事は谷口 昇先生、副委員長は二村昭元先生です。他に12名の委員の先生からなります。委員会の主な活動は、高岸直人賞、ベストアブストラクト、そして国際論文奨励賞の選考です。高岸直人賞の選考は、まず代議員による1次選考を行い、その後、選考委員による論文審査（2次選考）を行います。最終的に基礎論文から1編、臨床論文から1編を選出し、理事会に提案します。1987年より開始された伝統ある本学会のメインの賞で、本賞を受賞した先生の多くはその後、本学会でも中心的に活動されております。ベストアブストラクトは毎年開催される学術集会の抄録の中から選出され、本学会の公式英文機関紙であるJournal of Shoulder and Elbow Surgery(JSES)誌に掲載されます。国際論文奨励賞は、第47回日本肩関節学会学術集会会長末永直樹先生から提供していただいた基金を元に、日本から世界へ情報発信するため、本学会の公式英文機関紙であるJSES誌等への投稿を奨励するために設立されました。この奨励賞の設立以来、年々、JSES関連雑誌への日本からの投稿数は増加しております。引き続き積極的に投稿をしていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

社会保険等委員会

担当理事 望月 智之 委員長 長谷川 彰彦

社会保険等委員会では2026年度診療報酬改定に向けた改正要望書の作成を行い、2025年5月23日に外保連に提出を行いました。改正要望書を提出した術式は①肩関節唇形成手術（自家腸骨移植術を伴うもの）（関節鏡下） ②人工関節置換術・肩関節（腱移行術を伴う）の2つとなります。

この要望書が外保連を通じて厚生労働省に提出され、2025年7月頃に医療技術評価ヒアリングが行われる予定です。

日本肩関節学会で実施しております、肩の手術アンケートは外保連試案収載そして医療技術評価ヒアリングにおいて実態調査としての大きなエビデンスとなります。あらためて肩手術アンケートにご回答いただきました学会員の先生方に深く御礼申し上げます。なお、手術アンケートは4年に1回実施しておりますので、2025年度はアンケート実施の年度にあたります。2025年1月～12月実施の肩の手術に関してアンケートをお願いさせていただき予定にしておりますので、会員の皆様方のお力添えをいただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

教育研修委員会

担当理事 菊川 和彦 委員長 土屋 篤志

教育研修委員会では会員の皆様の肩関節診療に役立つ研修会やワークショップなど教育活動を行っております。今年度から新たに3名の委員が加わり、より充実した内容となるよう検討を重ねてまいります。今年度の活動予定についてご報告いたします。

第17回教育研修会は第52回日本肩関節学会の開催期間中である2025年10月11日に実施予定です。本研修会のプログラムは、昨年度と今年度を通じて肩関節疾患の診断・治療について体系的に学べる内容となるよう構成しております。

第17回教育研修会 会場:福岡国際会議場

日程:2025年10月11日(土)

教育研修講演1

演題1:関節不安定症の診断と治療

演者:名古屋市立大学運動器スポーツ先進医学講座 吉田雅人先生

演題2:肩のスポーツ障害の診断と治療

演者:横浜南共済病院整形外科 山崎哲也先生

教育研修講演2

演題1:肩関節周囲の神経障害

演者:千葉大学医学部整形外科 落合 信靖先生

演題2:肩のリハビリテーション

演者:丸太町リハビリテーションクリニック 森原 徹先生

また日本肩関節学会キャダバーワークショップも開催準備をしております。併せて第9回日本肩関節学会手術手技フォーラムも開催を予定します。毎回参加者の方からはご好評を頂いています。ぜひご参加下さい。

第9回 日本肩関節学会(JSS)キャダバーワークショップ

日時:2025年11月22日(土)～23日(日)

会場:名古屋市立大学先端医療技術イノベーションセンター

募集人数:12名(予定)

研修コース:①関節鏡コース ②直視下手術人工関節コース 計6テーブル

講師:専任講師6名(予定)

第9回 肩関節疾患手術手技フォーラム

会期:2025年11月22日(土) 18:00～

会場:名古屋市立大学医学部研究棟11F 会議室(予定)

プログラム

- ・ 関節鏡視下腱板修復術 –最近のトピックスを含めて–
- ・ 関節鏡視下バンカート修復術 –コンタクトスポーツへの対処法も含め–
- ・ 解剖学的人工肩関節置換術
- ・ リバース人工肩関節置換術 合併症の予防を含めて
- ・ 製品紹介・企業広告

今後も会員の皆様の診療に貢献できる活動を推進してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

学術委員会

担当理事 山門 浩太郎 委員長 藤井 康成

学術委員会の活動報告としては、現在、腱板の脂肪変性評価に関して調査を行なっております。

その目的は、日本におけるMRIによるGoutaller分類評価の信頼性に関する現状を把握するためであり、先ずはトライアルとして学術委員会委員を対象とし、検者内、検者間での信頼性に関して、解析を行なっている段階です。

現時点では、まだ棘上筋のみを対象としておりますが、腱板脂肪変性評価における基準と条件を明確化し、日本から発信できればと担当委員を中心にディスカッションを重ねております。本音を言うと、検者間、さらには検者内でも結果に少なからずばらつきが見られ、統計処理など苦戦している状況です。このばらつきをどのような条件設定を加えることで、信頼性を上げることができるか、今後検討すべき課題は見えるのですが、まだまだ調査は長引きそうです。

前回、新しい企画として紹介しました肩甲骨関節窩OCDのアンケート調査は、1回目の調査を行うべく、アンケートフォームがほぼ完成し、理事会での承認が得られ次第、近々会員の皆様に回答をお願いする予定であります。何卒ご協力いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

今年も、日本整形外科学会学術集会および基礎学術集会からのシンポジウム案の作成依頼があり、理事会での承認の元、以下を学会事務局に送付しました。

第99回日本整形外科学会学術総会

4つの企画案を事務局へ提出しました。

第40回日本整形外科学会基礎学術集会

1企画案：演題腱板修復促進に関する基礎的研究を事務局に提出しました。

今後とも学術委員会活動につきまして、会員の皆様の益々のご厚情ならびにご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

広報委員会

担当理事 田中 栄 委員長 夏 恒治

広報委員会では主にホームページとニュースレターの制作業務を担当しています。

現在、日本肩の運動機能研究会のホームページのリニューアル作業を研究会の広報委員の皆様を中心に進めていただいております、近日中の公開を予定しています（ニュースレター発刊時には既に公開されているかもしれません）。

また、引き続き医療従事者以外の一般の方に向けたホームページの作成、広告バナーの作成などに取り組んでいく予定です。

ニュースレターは今号で24号を迎えました。毎回多くの先生方にご寄稿をお願いしており、お忙しい中ご執筆いただいていることに心より感謝申し上げます。

今後も年2回（1月、6月）の発刊を継続してまいります、「このような記事を掲載して欲しい」「こういう記

事を書きたい」といったご要望がございましたら、いつでもご連絡ください。

なお前号(23号)の発刊に際しては、事務局の移管と時期が重なり、発刊が遅れてしまいました。この場をお借りして深くお詫び申し上げます。

財務委員会

担当理事 後藤 英之 委員長 酒井 忠博

財務委員会は2024年度より伊崎輝昌先生に担当理事をお願いして参りましたが、無事に第51回日本肩関節学会学術総会を終えたところで、次年度は後藤英之先生に担当理事をお願いすることとなりました。引き続き経験豊富な委員の皆様のお力をお借りして、出来る限り財務の改善に尽くしたいと存じます。

2023年度の財務報告としては前年度増収であった受取会費が減収となりました。これについては正会員と準会員1号の会費納入が少なかったことが主な原因と考えられます。また一番の懸案事項であったJSES購読料の支払額は為替レート150円想定で予算計上しておりましたが、結果的に120円で取り扱われることとなり、大幅な削減となりました。印刷物のペーパーレス化、会議のリモート化により経費削減が出来たこともあり、最終的には151,211円の増収となりました。

来期予算編成に向けての大きな問題点は事務局変更でありましたが、毎日学術フォーラムをお願いすることになったとのことです。予算案で計上された事務局委託費内に収まると考えていますが、今年度の決算にて御報告できると思います。また、昨年度と同様、今後も現在のような円安が長期化し、JSES購読料が増加するようであれば、JSESの購読についてのルールを見直すことや、年会費値上げを考慮せざるを得なくなることは変わりません。財務委員会としては、年会費の徴収を事務局に確実に行って頂くようお願いするとともに、各委員会との連携を強化し、事業費について早めに相談していくことや、引き続き可能な限り経費節減の努力をして参ります。

会員の皆様方におかれましては引き続き御理解、御協力を御願いますと共に、財務改善のため、お知り合いの先生へ会費納入を促して頂き、さらなる会員増加に御協力頂けますよう、よろしくお願い申し上げます。

定款等運用委員会

担当理事 谷口 昇 委員長 糸魚川 善昭

定款等運用委員会の新委員長に順天堂大学医学部附属浦安病院の糸魚川善昭が就任させて頂きました。私は2020年に日本肩関節学会の代議員となり定款等運用委員会、国際委員会、雑誌「肩関節」編集委員会の3つの委員会の委員を務めさせて頂きました。定款等運用委員会では、伊崎輝昌担当理事、西中直也前委員長を中心に他の委員の先生方と共に、日本肩の運動機能研究会会則案、日本肩関節学会役員選出規則、高岸直人賞選考規定、コロナ禍を契機に導入されたWeb選挙の継続に伴う関連規則の変更と改正など様々な仕事に従事させて頂きました。若輩ながらこのような名誉ある仕事をさせて頂き光栄に思います。伝統ある日本肩関節学会に少しでも貢献できるようしっかりと自分の役割を果たしていきたいと思っています。まだ就任から数カ月で新委員長としての依頼は頂いておりませんが、今後は新担当理事である谷口昇先生のご指導の下、委員の先生方と共に既存の規則等の改定や新たな規則等の策定に対応していきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

リバーズ型人工肩関節運用委員会

担当理事 菊川 和彦 委員長 松村 昇

リバーズ型人工肩関節運用委員会（以下、RSA委員会）は、長らく委員長をお務めいただいた山門浩太郎先生から松村昇がその任を引き継ぎいたしました。担当理事である菊川和彦先生および8名の委員の先生方とともに活動を行っており、またアドバイザーとして菅谷啓之先生、池上博泰先生、山門浩太郎先生に入っただき、盤石の体制を整えております。主な活動内容は、RSA適正使用基準運用に関連する症例相談と、RSA講習会における適正使用基準の説明およびJOANR登録率向上のための啓蒙活動となります。

ご存知の通りRSAは2014年にガイドライン（現適正使用基準）のもとで使用が可能となり、早くも12年目を迎えております。この間にRSAの手術件数は右肩上がりに増加していますが、未だに適応の判断に迷う症例も少なからず存在します。適正使用基準において「判断に迷う場合はRSA委員会に相談する」と記載されている通り、あくまでも相談であり許認可の決裁を行うわけではありませんが、判断に迷う症例の相談は常に受け付けています。

具体的な相談手順としては、日本肩関節学会事務局（office@shoulder-s.jp）に、該当の症例についてスライド（PowerPointあるいはPDF）の形式としてメール送付をお願いします。またご相談者が該当症例に対してどのように判断し、どのような術式を検討しているかについても記載して下さい。事務局に届いた相談案件は、担当理事と委員長で内容を確認のうえ、委員会の先生方に意見を伺っています。回答期間はおおむね10日ほどですが、手術の予定日がさしせまっているなど特段の事情があれば可能な限り対応しています。また症状が落ち着いた後で結構ですので、可能な限り治療経過をRSA委員会へフィードバックして下さい。

上腕骨近位部骨折に関連した相談は、原則として日本整形外傷学会（旧日本骨折治療学会）が窓口となりますが、骨折続発症や陳旧性脱臼などにおいて本学会のRSA委員会への相談を希望される場合にはお受けしています。相談症例の多くは65歳未満に対する適応ですが、この年齢要件は腱板機能不全が対象であり、関節リウマチや再置換例といった非「腱板手術」では65歳未満という記載がありませんので、RSAの使用は年齢により一律に排除されることはありません。適正使用基準は複数回にわたって改正・改訂が行われておりますので、日本整形外科学会の会員ホームページJOINTSに掲載されている内容について定期的な確認をお願いいたします。

日本肩の運動機能研究会運営委員会

担当理事 西中 直也 委員長 船越 忠直

日本肩の運動機能研究会（以下、研究会）は独立した団体ではなく日本肩関節学会内の一組織であり、研究会会員は日本肩関節学会会員（正会員、準会員1号、2号）で構成されています。研究会は日本肩の運動機能研究会運営委員会（以下、運営委員会）により運営され、実務は研究会世話人会が行います。運営委員会では、研究会会員が活躍、成長する場を提供すること、研究会が発展し様々な形で学術的業績を報告できる機会を提供することを目標としており、日本肩関節学会理事会、代議員会と綿密に連携し問題点を解決したいと考えております。

日本肩の運動機能研究会のホームページが改訂されます。日本肩関節学会広報委員会の田中理事、夏委員長にご高配を頂き、準会員の先生方に新しい情報が届けられるようにと考えております。多くのご

意見を頂き、より良いものにしていきたいと思います。ホームページの立ち上げに際して尽力頂きました運動機能研究会世話人会広報担当の遊佐先生、宮本先生をはじめ、関係各位に深謝申し上げます。

2026年9月22～25日にバンクーバーで第8回国際肩肘セラピスト学会 (ICSET)が開催されます。ICSETの開催支援組織として国際肩肘セラピスト学会連合(ICSSSET)が設立されました。日本はICSSSETの4つの設立国として、ヨーロッパ、オーストラリア、アメリカ合衆国と共に今後のICSETを発展させていく義務があります。準会員の皆様には、奮ってご参加頂けますようお願い申し上げます。

用語委員会

担当理事 田中 栄 委員長 佐野 博高

用語委員会では、2021年の発足時から、「日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会制定・関節可動域表示ならびに測定法」における、肩関節可動域測定法の改訂作業に取り組んでまいりました。2024年度には、椎体番号を用いた肩関節内旋可動域の測定法や、肩関節屈曲90度（いわゆる3rd plane）における内外旋角度の測定法を追加収載し、内転角度の表示・測定法について修正を加えた改訂草案を会員の皆様に公開し、広くご意見を募りました。この時会員の皆様からいただいたご意見を踏まえてブラッシュアップ作業を行い、理事会のご承認いただいた上で、日本肩関節学会による改定案として取り纏め、2025年5月に日本整形外科学会および日本リハビリテーション医学会に提出いたしました。今後両学会においてご検討いただくこととなりますが、当委員会としても改訂が早期に実現するよう、引き続き取り組んでいきたいと考えています。

また、本年度は五十肩、臼蓋、サイレント・マニピレーションなど、これまで検討してきた用語について、検討結果を公表するとともに、会員の皆様から新たに検討対象用語を募集し、学術用語としての位置づけについて検討を行っていく予定です。当委員会では、会員の皆様の正確な用語使用に資するよう、日本肩関節学会のweb siteやニュースレターなどで、審議内容をフィードバックしていきますので、引き続きご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。

選挙管理委員会

委員長 田崎 篤

2025年度の活動予定として、代議員選挙、理事選挙および第55回学術集会会長選挙を行います。選挙案内や候補者等の連絡は、随時会員サイトに掲示します。

1.代議員選挙について

代議員選出規則に基づき、下記の要領で選挙を実施する予定です。

- ・ 2025年6月に公示を行い、7月に公募する予定。
- ・ 2025年8月以降から10月の第52回学術集会までの然るべき時期にwebで信任投票及び必要に応じて選任投票を行う。
- ・ 当選人を第52回学術集会時の社員総会で発表する。

2.第55回学術集会会長選挙について

学術集会会長選挙規約に基づき、以下の要領で選挙を実施します。

- 2025年6月に公示を行い、7月に公募する予定。
- 2025年8月以降から10月の第52回学術集会までの然るべき時期にwebで投票を行う。
- 第52回学術集会時の社員総会で当選人を決定して、発表する。

地域格差検討ワーキンググループ

担当理事 谷口 昇 委員長 大前 博路

全ての地域において肩関節診療の医療水準を一定に保つこと、日本肩関節学会のさらなる発展のために、指導的役割を担う代議員が不在の地域をなくすことを目的に、地域格差検討ワーキンググループが設置されました。現在全国47都道府県のうち17の県で代議員が不在という状況にあり、その解消に向けた方策を検討しています。今後、会員の皆様にもご意見を伺うことになると思いますので、ご協力の程よろしくお願いいいたします。

都道府県	代議員	正会員	都道府県	代議員	正会員	都道府県	代議員	正会員
北海道	6	98	新潟	2	27	鳥取	0	8
青森	0	12	富山	1	10	島根	0	7
岩手	0	11	石川	0	17	岡山	1	26
宮城	4	37	福井	0	2	広島	3	49
秋田	0	17	山梨	0	6	山口	0	13
山形	2	26	長野	1	31	徳島	0	11
福島	0	17	岐阜	1	26	香川	0	16
東京	12	209	静岡	1	45	愛媛	1	9
茨城	1	22	愛知	7	87	高知	0	15
栃木	2	27	京都	3	49	福岡	4	120
群馬	3	33	大阪	12	116	佐賀	1	22
埼玉	1	53	三重	0	15	長崎	2	24
千葉	6	73	滋賀	1	16	大分	0	8
神奈川	5	99	兵庫	2	66	熊本	3	24
			奈良	1	21	宮崎	0	13
			和歌山	0	10	鹿児島	3	20
						沖縄	1	19

日本肩関節学会 委員会リスト (2025年1月現在)

常設委員会

雑誌「肩関節」編集委員会

担当理事	内山 善康
委員長	新井 隆三
副委員長	二村 昭元
委員	石垣 範雄、一ノ瀬 剛、糸魚川 善昭、井上 和也、大木 聡、梶田 幸宏、川崎 隆之、河野 友祐、 木田 圭重、桐村 憲吾、見目 智紀、芝山 雄二、設楽 仁、杉森 一仁、田中 誠人、寺林 伸夫、徳永 琢也、 永井 宏和、夏 恒治、橋本 瑛子、八田 卓久、平川 義弘、藤澤 基之、松木 圭介、間中 智哉、水城 安尋、 光井 康博、美船 泰、三好 直樹、森川 大智、山口 浩、結城 一声

国際委員会

担当理事	三幡 輝久
委員長	長谷川 彰彦
委員	糸魚川 善昭、瓜田 淳、大前 博路、高橋 憲正、二村 昭元、藤澤 基之、松木 圭介、松村 昇、森川 大智、 山本 宣幸、伊崎 輝昌(現会長として)、北村 歳男(次期会長として)

高岸直人賞決定委員会

担当理事	谷口 昇
委員長	山本 宣幸
副委員長	二村 昭元
委員	新井 隆三、井上 和也、大泉 尚美、大木 聡、菊川 憲志、木田 圭重、後藤 昌史、高橋 憲正、徳永 琢也、 中川 滋人、夏 恒治、廣瀬 聡明、今井 晋二(前会長として)、 伊崎 輝昌(現会長として)、北村 歳男(次期会長として)
アドバイザー	高岸 憲二

社会保険等委員会

担当理事	望月 智之
委員長	長谷川 彰彦
委員	大前 博路、見目 智紀、菊川 憲志、田中 誠人、高橋 憲正、土屋 篤志、名越 充、八田 卓久、早川 敬、 日山 鐘浩、廣瀬 聡明、山口 浩

教育研修委員会

担当理事	菊川 和彦
委員長	土屋 篤志
委員	落合 信靖、河野 友祐、国分 毅、酒井 忠博、佐原 亘、末永 直樹、山崎 哲也、山本 宣幸、吉田 雅人、 森原 徹
アドバイザー	後藤 英之

学術委員会

担当理事	山門 浩太郎
委員長	藤井 康成

委員 石垣 範雄、落合 信靖、梶田 幸宏、木田 圭重、後藤 昌史、田崎 篤、橋本 瑛子、水野 直子、三好 直樹、
松木 圭介、山本 宣幸、横矢 晋
アドバイザー 高瀬 勝己、塩崎 浩之

広報委員会

担当理事 田中 栄
委員長 夏 恒治
委員 植木 博子、梶 博則、梶山 史郎、土屋 篤志、橋本 瑛子、原田 洋平、堀籠 圭子、美船 泰、三宅 智、村 成幸
アドバイザー 北村 歳男

財務委員会

担当理事 後藤 英之
委員長 酒井 忠博
委員 伊崎 輝昌、石毛 徳之、国分 毅、佐原 亘、設楽 仁、永井 宏和、中川 滋人、村 成幸、結城 一声、横矢 晋
アドバイザー 岩堀 裕介
オブザーバー 今井 晋二

倫理・利益相反委員会

担当理事 望月 智之
委員長 名越 充
委員 芝山 雄二、新福 栄治、鈴木 一秀、田中 稔、水野 直子、水城 安尋、三宅 智

定款等運用委員会

担当理事 谷口 昇
委員長 糸魚川 善昭
委員 瓜田 淳、梶山 史郎、田崎 篤、光井 康博、門間 太輔、伊崎 輝昌

リバース型人工肩関節運用委員会

担当理事 菊川 和彦
委員長 松村 昇
委員 落合 信靖、梶 博則、木村 明彦、桐村 憲吾、小林 尚史、笹沼 秀幸、寺林 伸夫、間中 智哉
アドバイザー 菅谷 啓之、池上 博泰、山門 浩太郎

日本肩の運動機能運営委員会

担当理事 西中 直也
委員長 船越 忠直
委員 甲斐 義浩、黒川 大介、見目 智紀、小林 尚史、酒井 忠博、佐原 亘、高村 隆、田中 誠人、藤井 康成、
村木 孝行、吉田 雅人、森原 徹、山口 光國、山崎 哲也
アドバイザー 岩堀 裕介、浜田 純一郎
オブザーバー 三宅 智(第22回研究会会長として)

日本肩の運動機能研究会世話人会

代表世話人 村木 孝行
副代表世話人 甲斐 義浩、高村 隆
世話人 河上 淳一、千葉 慎一、三浦 雄一郎、宮下 浩二、山崎 肇、遊佐 隆
新世話人 石川 博明、内田 智也、宮本 梓

用語委員会

担当理事 田中 栄
委員長 佐野 博高
委員 笹沼 秀幸、鈴木 一秀、田中 稔、永井 宏和、三宅 智、門間 太輔、結城 一声、吉田 雅人

特別委員会

選挙管理委員会

委員長 田崎 篤
委員 井上 和也、大泉 尚美、新福 栄治、徳永 琢也

ワーキンググループ

地方格差検討WG

担当理事 谷口 昇
委員長 大前 博路
委員 杉森 一仁、八田 卓久、三好 直樹、山口 浩、梶山 史郎

事務局からのお知らせ

2025年2月より日本肩関節学会の学会事務局を株式会社毎日学術フォーラムにて担当させていただいております。大変大きな役割の貴学会の事務局としてお役に立てることを大変嬉しく思います。会員の皆さまにはご迷惑をおかけしているかと存じますが、誠心誠意努めてまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

ご不明な点等ございましたら下記までご連絡ください。

《一般社団法人 日本肩関節学会事務局》

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル

株式会社毎日学術フォーラム内

TEL: 03-6267-4550 FAX: 03-6267-4555

E-MAIL: office@shoulder-s.jp

※平日9時半～17時半（土日祝日休み）

編 集 後 記

広報委員会 土屋 篤志

ニューズレター24号を最後までお読みいただき、ありがとうございます。本学会のホームページおよびニューズレターの刷新から1年が経過し、学会の活動や魅力をより広く発信できるようになりました。今後もさらに有益な情報をお届けできるよう、誌面の改善に努めてまいります。

さて、2022年11月にChatGPT-3.5が登場し3年足らずですが、生成AIの進化が社会の変化を加速させています。加えて、汎用型AIの登場もそう遠くはないと言われており、技術の発展は私たちの生活や仕事に大きな影響を与えつつあります。医療分野においても、AIの導入が徐々に進み、診療や研究の効率化が期待されています。こうした変化の中で、AIに使われるのではなく、AIを活用できるよう、自らの方向性をしっかり持つことが重要だと考えます。

最後に、本号の発刊にあたりお力添えをいただいた担当理事の田中先生、委員長夏先生、新事務局の皆様、広報委員会の先生方に心より感謝申し上げます。



編集：一般社団法人日本肩関節学会 広報委員会

田中栄（担当理事）、夏恒治（委員長）、植木博子、梶博則、梶山史郎、土屋篤志、橋本瑛子、原田洋平、堀籠圭子、美船泰、三宅智、村成幸、北村歳男（アドバイザー）

発行：一般社団法人日本肩関節学会

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 株式会社毎日学術フォーラム内

TEL：03-6267-4550 / FAX：03-6267-4555

E-mail：office@shoulder-s.jp / URL：https://www.j-shoulder-s.jp/